

金沢大学 資料館だより

NO.15



KANAZAWA UNIVERSITY MUSEUM

ISSN 1342-0380

収蔵の基本方針

三 好 義 昭

平成8(1996)年1月、学術審議会から出された「ユニバーシティ・ミュージアムの設置について(報告)－学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について－」は、大学の研究・教育活動の結果、蓄積されていく「学術標本」について述べ、それらを保存・活用する施設として「ユニバーシティ・ミュージアム」の必要性を説いた。同報告は、「学術標本」を「学術研究により収集・生成された『学術研究と高等教育に資する資源』」と定義し、大学における博物館・資料館等の資料収集のあり方に強い示唆を与えた。当資料館では、同報告を受け、資料館委員会および学術情報委員会の議を経て、この度「収蔵の基本方針」を策定し、今後、以下の「学術標本」および「本学の歴史に関わる資料」を収集することとした。

1. 「学術標本」(＝研究・教育に資する資料、研究・教育に貢献した資料)
 - 1-1 文化史資料
 - 1-2 自然史資料
 - 1-3 科学技術史資料
2. 本学の歴史に関わる資料
 - 2-1 本学の歴史に関わる資料
 - 2-2 本学に在籍した教官の研究・教育に関わる資料

資料館では次の段階として、基本方針の各項目について、「収蔵基準」を作成する作業に着手している。同時に平成11年12月8日付で「学術標本」・「本学の歴史に関わる資料」の保有・活用状況について全学調査を開始した。学内の方々にはお手数ながら御協力をお願いする次第である。

1. 学術標本について

上述の学術審議会報告の重要な点は、大学における資料館等のあり方として、従来の文化史資料偏重の傾向やいわゆる名品主義を払拭し、資料収集の受け皿を拡張した点にあると言える。

すなわち、論文報告等に記載されている等学術的な履歴が明らかであれば、見た目の美しさは問わない。

本学教官が研究上収集した貴重な資料(学術標本)は、関係部局で継承され退官後も保存されるのが適切である。しかしながら、諸般の事情で、継承・保存が困難となった資料(学術標本)を受託し、保存・再活用するための施設としての役割を担うのも当資料館の重要な責務であります。

2. 本学の歴史に関わる資料について

本学の歴史に関わる資料は、明らかに「学術標本」とは異なった性格をもつ。大学博物館ではなく、原文書・記念物品を扱う大学文書館的な資料である。大学文書館的な資料のうち、当資料館で収蔵の対象とするのは、記念物品、写真等の「もの」の資料である。具体的には、以下の「もの」となる。

- ① 校旗・看板・印章・プレート等
- ② 教官の研究教育に関わる資料(原稿・講義ノート・設計図・試作品等)
- ③ 刊行物(記念誌・機関誌等)
- ④ 実験機器類、備品
- ⑤ 視聴覚資料(写真・ビデオ・録音テープ等)
- ⑥ 学生団体の発行する新聞、雑誌、ピラ、アルバム等
- ⑦ 同窓会関係史料(同窓会報、同窓会名簿等)
- ⑧ 卒業生の卒業証書、アルバム、受講ノート等
- ⑨ その他

なお、「本学の歴史に関わる資料」のうち、前身校に由来するものは、記念物品というよりも歴史資料＝学術標本とみなすことができる。

全学での資料の保有状況から、当資料館での収集計画がたてられるはずである。一方で、貴重な資料を受け入れて死蔵しないための資料館側の体制づくりが必要になろう。現段階では全学調査の回答待ちである。今回の調査結果から、資料館の近未来が見えてくることを願っている。(資料館長)

世界の博物館・5

「デンバーのチルドレンズ・

ミュージアムをみて」

野間成之

1999年5月、アメリカのコロラド州デンバーにあるチルドレンズ・ミュージアムを訪れる機会を得た。

チルドレンズ・ミュージアムとは一体どんなものなのか、この目で確かめたかった。アメリカ各地にあって、特にボストンやシアトルのそれは有名だといわれている。

砂漠の真ん中に忽然と現れた都市デンバーにもチルドレンズ・ミュージアムがあるとは信じがたいと思っていた。ところが、既に25年の歴史を有しているのだという。さすがは本場アメリカである。

さて、当日は雨降りだったが、館内は子どもたちで賑わっていた。有料である。入口のところではピエロの姿をした女性が、子どもたちの顔にペインティングをしていた。女の子がイスに腰掛けて猫の顔にしてもらっていた。そんな子が何人もいるのである。こういったところからもチルドレンズ・ミュージアムは勉強の場所ではなく、楽しむところなのだということがよく分かる。

まず感心したのは、一階にあった車イスを自由に操作して体験できるコーナーである。そこは、障害者用住宅の台所になっていた。家具や流し台の高さが、車イスに乗って操作しやすい高さになっていた。



人気のお店コーナー



ノコギリに夢中な少女

車イスの人の生活とはこういうものである、といった類の説明は見当たらない。実際に操作し、その高さを実感することに重点を置いているのであろう。次の部屋では5人の子どもが車イスバスケットボールを楽しんでいた。どの子も障害を持っていなかった。車イスを見事に操作していた。こうした光景は日本ではめったにみられないのではないだろうか。

2階は子どもでごったがえしていた。一番人気があったのは「お店」である。レジスターのところにいる子、買い物をしている子。年齢は4～7歳ぐらいの子が多い。自分が主人公になっているいろいろな役割を演じる楽しさがそこにはあるのだろう。こういった「ごっこ遊び」の経験をたくさん積むことは大切なことである。

工作コーナーの様な場所も人気があった。子どもが万力にも切れをはさんで、ノコギリで切っている。そして、それに車輪をつけて走らせることになっていた。付添の父親らしき人が心配そうに見守る中、子どもはとても熱心にやっていた。

もう一つの人気のスポットは、部屋全体が「3匹のくま」というお話のくまの家に作ってある場所である。大きなイス、中ぐらいのイス、ちいさなイス、お父さんグマ用のベッド、お母さんグマ用のベッド、子グマ用のベッドがある。子どもたちは、自分をそれぞれの人物(?)にみたてて遊んでいた。なるほど、

「蒸汽機器雛形」を動かす

今江新成

こういうスペースが幼稚園や学校にもあるといい。

さらにもう一つ、1階に小さな劇場があった。照明設備もあり、ちょっとした演劇、人形劇が楽しめる空間になっている。そこでは毎週、いろいろなショーが行われているという。

以上、かけ足で私の印象を書いた。全体的な印象としては、展示物や道具など子どもの興味、関心をどう引き出すかに力点が置かれているようである。そのために、まずは子どもを楽しませることに力を注いでいるのであろう。

チルドレンズ・ミュージアム(日本では「子どもの博物館」と呼ばれている)の基本理念はハンズ・オンである。これを「体験学習」と訳してしまうとイメージが狭くなってしまう。要するに、ハンズ・オフ(手を触れてはいけない)ではなく、五感を使って自分で確かめることが素晴らしいという考え方なのである。思いきり遊んでほしいということだと言い換えてもいいだろう。

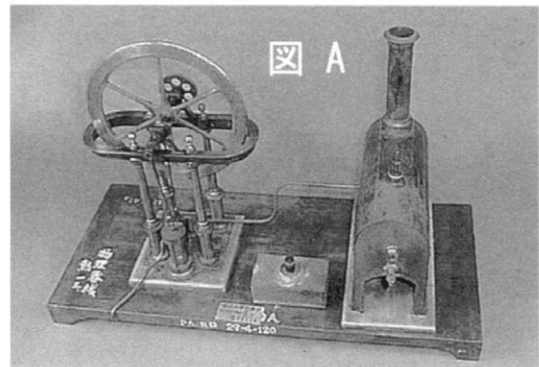
このような発想でつくられた「子どもの博物館」は、日本にはまだ存在していないといっても過言ではない。日本の教育、特に学校教育においては「〇〇してはいけません」という禁止項目がいやというほど存在している。そして型にはめることに今まで素晴らしく熱心であった。

しかし、「ハンズ・オン」はそれらと真っ向から対立するものである。禁止されるのではなく、実際に「触ってみる」ことができること、教えられたり、説明を聞かされるのではなく、自分で「試してみる」「考えてみる」「工夫してみる」ことができるのである。

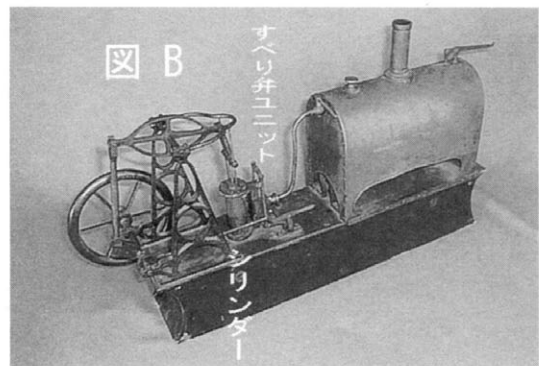
この金沢にも、こういう発想のミュージアムができるように、少しずつ歩みだしたいものである。

(金沢市立小坂小学校教諭)

かつてSLの動力として活躍した、蒸気機関の模型は四高物理実験機器の中に3台残っており、その裁断模型も3種類ある。裁断模型でメカニズムを理解させ、実際に熱機関としての運転を実演し、その逞しさを直に体験させた教具だと思われる。



図(A)の機体は、土台の部分が大理石造りで加工精度も良く、部品が揃っているので運転も再現出来そうであった。潤滑油を差し、ボイラータンクに少量の水を入れ、アルコールランプで沸してみると、5分間ぐらいで沸騰した。蒸気が送られ、ピストン部の温度が上がるにつれて力強く動きだした。パッキングが老化して蒸気漏れが多いにもかかわらず「シュツ、シュツ！」と動く様は感動的である。実用機が活躍した当時の四高生はより、感激したことであろう。



また、図(B)の機体は、その台裏に「文久元年酉年」と「製作者」らしき記名がある。各部品は手作り

らしく、分解し組み立てる時、同じサイズのねじでも元の穴にしか合わなかった。貴重品ゆえ、熱を使わずに自転車の空気入れで運転を試みたが、空気漏れが多く圧力不足であった。電動コンプレッサーで圧縮空気をボイラータンクに送り、徐々に気圧を上げると、重々しく動き始めた。空気漏れが多い分、発生するSL的な音響も見事で、逞しきこのうえない。レプリカを作って再登場願いたい機体である。



また、図(C)はボイラーに気密漏れがあった。仮止めして、自転車の空気入れを用い、そのタンクに空気を送ってみたところ、動いた。空気入れで動くなら、家庭用ヤカンの蒸気で可能だろうと、ヤカンの蓋を密閉し、注ぎ口から噴出する水蒸気をボイラーにつな

いだが、蒸気の温度が下がり、動かない。この機体(C)には前2機体(A, B)にあった滑り弁のユニットがない。しかも、蒸気シリンダーが首振り運動をする点が特異である。その構造を調べるため分解してみると、蒸気シリンダー下部に蒸気取り入れ口の

横穴が1つあり、それに対面し、隣接する支柱の基部に2つの小孔がある。そのうちの1つがボイラータンクへ繋がりが、他は排気孔であった。ハーモニカで音を出す時の様に首振りによって、シリンダーをボイラータンクに繋ぐか、排出孔に繋ぐかを選び分ける仕掛けであると解った。そこで蒸気の温度低下を防ぐため、この支柱基部の小孔から直接シリンダーにヤカンの蒸気を送ってみると動き出した。これはあたかも、J.ワットが「ヤカンから吹き出す蒸気を見て、蒸気機関を発明した」との話をも具現化できた思いがした。

この他に「熱空気機関」、「ガソリンエンジン」「蒸気タービン」、「ペルトン水車」、「タービン水車」、「水反動車」等がある。当時は身近な機械器具を多数教材化し、目前で運転しながら教えていた様子が伺える。四高物理実験機器はここに取上げた例でも見られるように、台や支柱にも装飾が施され、美的な心意気が感じられる。しかも、ブラックボックス的なところがなく分解、組み立ても妨げない。これらの付帯的なことも、学生の美的センスを高め、「心を動かす」ことにもつながったと思われる。これらの機器に「手をふれ」実験した学生達は学習意欲を高められ、科学的センスが涵養されたことであろう。

(石川県教育委員会生涯学習課自然史資料整備室所属)



特別展報告

「hands on!—四高物理実験機器のある風景」

今回は特別展のテーマを「hands on」として、講演会と連動して行った。金沢大学の前身校である第四高等学校の物理学実験機器の一部をハンズ・オンスタイルの展示(具体的には、手に取って確認ないし操作してもよい資料)にすることで、当時の風景に想像をふくらませていただけるような展示を試みた。

展示資料は当館所蔵の四高物理機器86点(貸出中のもの4点と破損の著しい1点を除くすべての資料)、カタログ類、県の自然史資料整備室より借用の資料約40点。(借用資料リストは以下の通り。)

蒸気機関、螺旋ポンプ(レプリカのみ)、サイレン盤、ジャ

イロ独楽、ラジオメートル、共鳴独楽、重点験器(17点)、発音木棒(レプリカ2点付)、表面張力実験器(4点とレプリカ付)、浮沈子(2点とレプリカ付)、魔盃・魔漏斗(金属2点ガラス1点とレプリカ付)、ジャイロスコープ(2台)、熱線反射鏡(1セット)、ウンデル熱電偶(2台)、気秤、音反動車、振り子時計(補正振り子付)、地磁気発電器、電話(2本組)

好評につき、12年3月まで常設展として展示してありますのでお気軽にお立ち寄り下さい。

なお、末尾になりましたが、今回の展示にあたり、今江新成氏(石川県教育委員会 生涯学習課 自然史資料整備室)に多大なる御協力と御指導をいただきました事に心よりお礼申し上げます。

資料館講演会(染川香澄氏)

「ハンズ・オンの魅力— childrens' museum の現場から」を聴いて

宮 さやか

平成11年度資料館講演会は、「ハンズ・オンの魅力—Children's Museum の現場から」と題して講演者に現在、博物館の分野で注目されているチルドレンズ・ミュージアムに関わる仕事で幅広く御活躍中の染川香澄さんをお招きして、平成11年11月5日(金)、金沢大学附属図書館 AV 室にて行いました。その模様を紹介いたします。



壁面全体に展示されている生物模型の数々

■「ハンズ・オンはマインズ・オン！」

ハンズ・オンというのは、アメリカでよく使われている言葉で、「実践的に学ぶ」(learning by doing)という言い方もされます。例えば、タクシーの見習い中の人に「ハンズ・オンってなに？」と聞けば、「私が今やってる、これがそうよ！」といわれたこともあるくらい、日常的な用語なのです。

そのことばを、博物館での展示をさして使うときには、単に触れる展示というだけでなく、触って動かして理解するということまで含んだもの、触りながら不思議だなあ、おもしろいなあと思う気持ちを喚起するということを含んだものであるということです。これが、ハンズ・オンはマインズ・オン、つまり「心が動かされる」ということなのです。

また、ハンズ・オンというものは、理論を組み立

てるのではなく、自分自身もハンズ・オンしてみないとわからないもの。そこで今回は、実際に博物館の中でどのように活用されているのかをアメリカのこどもの博物館の例をとって具体的に紹介していきたいと思います。

■面白みを伝えることに貪欲。そして…

アメリカのこどもの博物館(Children's Museum)の学芸員たちは、自分たちが研究していることを一人でも多くの人に「おもしろい！」と思ってほしいということに貪欲です。どうしたら分かりやすいか、伝えたいことが伝わるのか、ということに来る人の立場に立って考えるために、エバリュエーション(評価)をします。これが日本とアメリカの博物館展示の決定的な違いなのですが、例えば、「カエルが跳ぶ」ということに関しての展示を作りたいときに、模型を作って子どもたちのところに持って行く。子どもたちは「跳ぶ」ということに対して、どのような関心を持っているのか、どうしたら理解につながるのかを何回も試すわけです。プロどおしでやっても、もともと興味のある人たちだし、ある程度わかっているのだから意味がない。ということで子ども、あるいは一般の人たちに見てもらうわけです。

そうやって考えられた展示をどのように見せれば、分かりやすく、面白みが伝えられるのか。そのいい例が一つあります。

この例では日常にあるもの—コップなどを洗うゴム製のタワシーを使って、水中から陸に上がってきた生物の説明をしています。水中にゴム製タワシがあるのですが、ボタンを押すと水面が下がって、ゴムタワシだけが残る。水中ではきれいに丸く広がっていたものが、陸に上がるとその形をとどめることはできない、つまり陸に上がるときちょっとした骨格が必要だということをうまく説明しているのです。

また、もう一つの例として、剥製を見て、子どもたちが「これ、生きてるの、死んでるの？」とまじめに聞いてくる。そのことを逆手にとって、そこに子どもたちの興味があるのなら、と剥製を半分に切って中を見せる展示をする。こうやってできているよ



恐竜の骨の化石(レプリカ)と遊ぶ子どもたち

ということを見せるわけですね。恐竜の肌、骨格模型だけでなく、肌のついた恐竜の模型も博物館の中で再現されているが、それは再現されているにすぎない。つまり、発掘された肌の化石や、あるいは生きているワニの肌を観察することによって、研究者が考えて、アーティストが作り上げたのだという研究のバックステージも見せることで興味を喚起するというのもまた大切な展示の在り方です。

更にいえば、一つの正しい答えを出すのではなく、新しいことが発見されれば覆されていくということを見せる展示もあります。

デンバーの恐竜の展示では、恐竜の研究も時代の中で学説が変わってきたことを紹介し、最後に、こういうメッセージが伝えられます。

「だけでも、まだわからない。真実はわからない。まだこれから何かが出てくることもあって、新しい科学者が本当の恐竜の姿を教えてくれるかもしれない。そしてそれは君かもしれない。」

■負の展示

また、「美しいもの」だけでなく、「負」の部分を見てもらう展示もされています。これは次代を担う子どもたち、一般の人々にもいろんな意味で興味を持ってもらうために必要なことであると考えられています。

例えば、オイルのタンカーが座礁した地域にあった熱帯魚の水槽くらいのちいさな展示。それには脱帽しました。オイルのタンカーが座礁したあと、海

底ではなにが起こっているかを見せる展示で、波によってオイルがだんだん沈殿して行く様を再現したもの。何年間も展示してあるため、その間にもどんどん沈殿していつているのがわかるようになっていました。街のイメージが悪くなるようなものは出さない！ではなく、こういうものを見るからこそ、もっと気を付けよう、自分にはなにができるかということ、その展示に出会った人々が考えるきっかけにもなるのではないのでしょうか？

(以上、講演会の抄録)

講演会は、多数のスライドと、それに関する説明をいただくという形式で行なわれました。お話を聴くだけでなく、スライドを見ることでよりイメージが豊かになる講演会でした。実際にいってみて、体験しないと分からないのがハンズ・オン。でも、なるべくその様子が伝わるようにと工夫されたところが既にハンズ・オンの発想と思います。

(資料館)

資料館彙報 (平成11年9月～平成11年12月)

- 9月：平成11年度第2回資料館委員会を開催。(28日)
- 10月：「資料館だより No.14」を発行。(1日)
- 10月：大韓民国 国立全州博物館 金圭東氏(石川県立歴史博物館研修員)，来館。(20日)
- 10月：陶芸家・第十代大樋長左衛門氏(元 本学教育学部教授)から寄贈された「大樋焼 飴釉 角のある花器」(詳細は「アカンサスニュース第34号」，1999.4.)が，搬入された。常設展で展示中。
- 10月：中華人民共和国 南京図書館 馬寧氏，尹増澤氏，附属図書館，資料館を視察。(28日)
- 11月：平成11年度資料館特別展「“hands on!!”－四高物理実験機器のある風景」を開催。(1日～5日)(p.5 に関連記事)
- 11月：林学長が来館，特別展を見学。(2日)
- 11月：染川香澄氏を招き，平成11年度資料館公開講演会「ハンズ・オンの魅力～ children's museum の現場から」を開催。(5日)(p.6～7に関連記事)
- 11月：平成11年度第3回資料館委員会を開催。(29日)
- 12月：「学術標本」及び「本学の歴史に関わる資料」についての全学調査。(8日付)

金沢大学資料館紀要第2号掲載論文募集

平成12年度に発行予定の金沢大学資料館紀要第2号の論文・報告を募集します。

金沢大学資料館紀要は，資料館活動の研究面を充実させ，資料館の存在を学内外にアピールするため，平成10年3月に第1号が刊行されました。

資料館紀要は「資料館収蔵品及び本学に関する歴史的資料もしくは文化的・学術的価値を有する物品に関する論考・調査報告」を掲載します。正式な編集要領が未定のため，第2号までは，「内規」により原稿依頼という形をとりますが，投稿原稿も受け付けます。投稿される方は，資料館までお知らせください。

おおよその分量：400字詰原稿用紙60枚程度，原稿締切：平成12年11月

第1号掲載論文・報告

御影雅幸「ネパール王国のムクチナート伝統医学病院で蒐集されたチベット薬物」

川口法男「成瀬正居日記修復資料一切」

米林勝二・山瀬晋吾「龍護寺旧蔵の木彫仏」

金沢大学資料館だより <第15号>

館長 三好 義昭 (教育学部教授)

館員 在田 則子 (事務補佐員)

館員 宮 さやか (事務補佐員)

〒920-1192 金沢市角間町金沢大学附属図書館内 発行日 平成12年2月1日

電話 (076)264-5215

編集発行 金沢大学資料館

F A X (076)234-4051

印刷 田中昭文堂印刷株式会社

E-Mail museum@kenroku.kanazawa-u.ac.jp